

## ヨハネ福音書 4-6 章における「しるし」と講話

東 よしみ

### はじめに

ヨハネ福音書 1-12 章のイエスの公の活動を報告する部分には、「しるし」(σημεῖον) とテキストの中で呼ばれる奇跡的出来事を中心とする複数のエピソードが含まれる。現在広く支持されているのは 7 つのしるしを数える立場で、それらは、1) カナの婚礼 (2:1-11)、2) 王の役人の息子の癒し (4:46-54)、3) 38 年間病気で苦しんでいる人の癒し (5:1-18)、4) 供食 (6:1-15)、5) 水上歩行 (6:16-21)、6) 盲人の癒し (9:1-41)、7) ラザロの復活 (11:1-12:11) である<sup>1</sup>。このなかで復活という主題との関連性を強くもつしるしは言うまでもなく、最後にして最大の奇跡と言えるラザロの復活のしるしであるが、他のしるしについても復活という主題との結びつきが強く見られる。特に注目に値するのは、4-6 章に配置されている 4 つのしるしである。まず 4-5 章では、イエスによる 2 つの連続する癒しのしるし物語 (4:46-54; 5:1-18) の後、長大な 5 章の講話部分ではじめて人間一般の復活について述べられる<sup>2</sup>。そして、続く 6 章では、供食と水上歩行という 2 つの連続するしるし物語 (6:1-15, 16-21) の後に、再び講話が語られ、そこでは終わりの日の復活が宣言される<sup>3</sup>。すなわち、5 章と 6 章の講話は、いずれも復活の主題を含み、かつ、2 つの連続するしるし物語の後に配置されていることになる。ここで考えねばならないのは、以下の問いである。はたして、しるし物語と復活に言及する講話とは、互いにどのような関係に立つのであろうか。また、両者が連続して配置されていることは、読者にどのような効果をもたらしているのだろうか

- 1 異論として、他の奇跡とは違い σημεῖον という用語が使われない水上歩行の奇跡については、これをしるしと数えず、7 つめのしるしはイエスの復活だと主張する研究者もいる。たとえば Joseph A. Grassi, "Eating Jesus' Flesh and Drinking His Blood: The Centrality and Meaning of John 6:51-58," *BTB* 17 (1987): 24-30 を参照。
- 2 多くの研究者は、5 章の講話がラザロの復活に先取的に言及するものであると指摘している。特に以下を参照。Raymond E. Brown, *The Gospel According to John* (2 vols.; The Anchor Bible 29-29A; Garden City, NY: Doubleday, 1966-70), 1:220; Jörg Frey, *Die johanneische Eschatologie* (3 vols.; Tübingen: Mohr Siebeck, 1997-2000), 3:415-416; Wendy E. Sproston North, *The Lazarus Story within the Johannine Tradition* (JSNTSup 212; Sheffield: Sheffield Academic Press, 2001), 91.
- 3 6 章の講話も、ラザロの復活との重なりを強くもつことが指摘されている。特に以下を参照。Jörg Frey, "Eschatology in the Johannine Circle," in *Theology and Christology in the Fourth Gospel* (ed. G. Van Belle, J. G. van der Watt, and P. J. Maritz; BETL 184; Leuven: Leuven University Press/Peeters, 2005), 47-82, esp. 81.

か。さらに、ヨハネ福音書におけるしるしのもつ神学的意義とは何であろうか。

これらの問いに取り組むにあたり、ヨハネ福音書におけるしるしの位置づけと神学的評価について、主な先行研究を簡単に見ておこう。まず、資料批判の立場を代表するブルトマンは、奇跡を報告するしるし資料を物質主義的で原初的な信仰を示すものと位置づけた上で、福音書記者ヨハネはこのしるし資料を神学的に高度な次元から編集したと見る<sup>4</sup>。すなわち、しるしとは物質的な奇跡がなければ信じることができない人間の弱さのために、譲歩的に与えられたものに過ぎない<sup>5</sup>。そこでは、しるし資料に見られる物質主義的、即物的な神学と、講話に見られる福音書記者の神学とは対比され、緊張関係におかれる。ブルトマンにとって、しるしは比喩あるいは象徴であり<sup>6</sup>、その意味は講話のうちに発展的に示されるものである<sup>7</sup>。

しるしを象徴と捉える理解は、しるし資料の使用を必ずしも前提としない文学批評においても引き継がれる。リーによれば、ヨハネ福音書におけるしるしのもっとも重要な特徴は、それが象徴であるという点にあり、しるしは、物質的な世界を越えた象徴的なレベルのリアリティーを示すという機能をもつものである<sup>8</sup>。読者は、字義的で即物的なしるしの解釈から離れて、象徴的で霊的な次元の意味へと到達するように導かれる<sup>9</sup>。そしてこの象徴的な意味が、読者に十分に明らかにされるのは、主に講話部分においてである<sup>10</sup>。つまり、方法論は異なっても、ブルトマンとリーは、物質的な奇跡を指すしるしを、その意味を明らかにする講話（言葉）よりも神学的には下位に位置づける点では変わらない。そこでは、物質的なものと霊的なものの二元論が暗黙裏に前提とされ、後者は前者よりも高次のものとみなされているのである。このような解釈においては、しるしがもつ神学的な価値は十分に評価されているとは言えない。

他方、しるしを積極的に評価する研究も存在することを指摘しておこう。代表的な例として、資料批判の立場からはニコル、文学批評の立場からはトンプソンの研究が

4 R・ブルトマン『ヨハネの福音書』、杉原助訳、日本キリスト教団出版局、2005年、166-167頁。

5 ブルトマン『ヨハネの福音書』、194頁。

6 R・ブルトマン『ブルトマン著作集4 新約聖書神学II』、川端純四郎訳、新教出版社、1966年、296-297頁。

7 ブルトマン『ヨハネの福音書』、356頁。他方、フォートナは、しるし資料と福音書記者の神学をブルトマンよりも連続的に解釈し、両者の間に「発展」を見る。しかし、フォートナの場合も、しるし資料は福音書記者の神学よりも低次元の神学を表明している点では変わらない。Robert T. Fortna, *The Fourth Gospel and Its Predecessor* (Philadelphia: Fortress Press, 1988), esp. 257. また、ブルトマンの考えをさらに押し進めて、ベッカーは、奇跡的出来事は信仰にとっては意味をもたないとする。Jörgen Becker, "Wunder und Christologie," *NTS* 16 (1970), 130-148, esp. 146.

8 Dorothy A. Lee, *The Symbolic Narratives of the Fourth Gospel: The Interplay of Form and Meaning* (JSNTSup 95; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994), 14.

9 Lee, *Symbolic Narratives*, esp. 115, 117, 137, 159; eadem, *Flesh and Glory: Symbol, Gender, and Theology in the Gospel of John* (New York: Crossroad, 2002), 17.

10 Lee, *Symbolic Narratives*, esp. 111-112.

あげられる。ニコルによれば、しるしは象徴以上のもので物語として語られる価値をもち、しるしとその解釈とは、互いに切り離すことができずに相互に重なり合うものである<sup>11</sup>。同様に、トンプソンも、しるしと講話との密接な結びつきを論じつつ、講話同様にしるしもイエスのアイデンティティーを明示するもので、しるしの物質的な側面は、イエスの人性を理解するための鍵であるとする<sup>12</sup>。両者の研究では、しるしの神学的意義は積極的に評価されているものの、特にトンプソンの研究では、それは、イエスが何者であるかを論じる狭い意味でのキリスト論的な問いに限定されるという点において不十分である。

この論文では、以下、文学的な手法を用いてヨハネ福音書 4-6 章のしるし物語と講話とを読み解き、そこでの両者の関係及びしるしの神学的意義を考察する。とりわけ、読者の読み行為に注意を向け、読者がしるし物語と講話とを読むことを通して、どのように復活という主題を自らのものとするのかを考えたい。その際、しるしの神学的意義を狭い意味でのキリスト論の領域に限定するのではなく、より広い救済論の射程の中で考えることとする。復活の主題と深く関わるヨハネ福音書 4-6 章のしるし物語と講話の関心は、イエスが何者であるかを問う狭いキリスト論に限定されるものではなく、それはさらに、このイエスが人間、そして世界にどのような救いをもたらすのかを問う、救済論にまで広がるものだからである。

結論から先に言うならば、ヨハネ福音書 4-6 章において、しるし物語と講話とは有機的に結びついて、復活という主題が通底するひとつの物語を形成する。まず、奇跡的出来事を描くしるし物語は、読者が、復活の諸様相を身体的、具体的、感覚的な出来事として、物語世界の中で先取的に経験することを可能にする。続く講話は、この復活を未来に起こることとして予告すると共に、読者にこの主題の理解を深めさせ、決断を促す。最後に、しるしの神学的な意義とは、キリストであるイエスがもたらす救済の諸様相を、その物質的、身体的な側面のうちに具体的に示すことにある。

## 1. ヨハネ 4-5 章におけるしるしと講話

ヨハネ 4-5 章では、ガリラヤにおける王の役人の息子の癒し(4:46-54)、そしてエルサレムにおける 38 年間病気で苦しんでいる人の癒し(5:1-18)という、2 つの連続する奇跡物語に続いて、長大な講話が語られる(5:19-47)。その前半部分に位置する講話(5:19-29)は復活への言及が顕著であり、この講話を構成する 3 つのセクション

11 Willem Nicol, *The Semeia in the Fourth Gospel: Tradition and Redaction* (SNT 32; Leiden: Brill, 1972), 110; cf. 107, 123.

12 Marianne M. Thompson, *The Humanity of Jesus in the Fourth Gospel* (Philadelphia: Fortress Press, 1988), esp. 62-63, 83.

(19-23, 24-27, 28-29 節)のすべてに、復活に関する言葉が現れる(21, 24-25, 28-29 節)。

ヨハネ 4-6 章の研究史を見ると、4 章のガリラヤでの癒し、5 章のエルサレムでの癒し、6 章のガリラヤでの供食、という地理上のつながりの悪さを説明するために、5、6 章は元の順序が入れ替わったものとする錯簡説が提案されてきた。この説に従えば、本来のテキストの順序は 4→6→5→7 章であったことになる<sup>13</sup>。しかしながら、5 章と 6 章が入れ替わったことを示す写本上の証拠はなく、現行の順番をオリジナルとみなす研究者も多く存在している<sup>14</sup>。なかでもピアズリー・マーレーは 4:43-5:47 を一つの大きな単位として理解し<sup>15</sup>、ボルゲンは、現行の順序の内に、5 章のテーマがさらに 6 章で発展すると考える<sup>16</sup>。以下に述べるように、復活というテーマに着目するならば、4 章と 5 章の 2 つの治癒奇跡及びそれに続く講話は、「命」と「裁き」という復活の 2 つの側面を一貫して扱うひとつながりの物語として読むことができ、また、4 章から 5 章、6 章にかけては復活という主題の発展を見ることができる。

まず、4 章のガリラヤにおける王の役人の息子の癒し(4:46-54)は、「疑似」復活の癒し物語として、死から生への移動としての復活という、5 章の講話のテーマ(5:24-25)を導入するものである。このしるし物語は、単に役人の息子の病が癒されたことを報告するものではなく、この癒しが瀕「死」から「生」への移動であったということ強調する。役人の息子は病であった(46 節)。父親が、カファルナウムからカナにいるイエスのもとへと来て、息子を癒してくれるようにイエスに頼んだのは、この息子が「死にかけていた」(47 節)からである。息子の父親である役人は、イエスに、「主よ、わたしの息子が死ぬ前に来てください」(49 節)と頼む。イエスの「あなたの息子は生きる」(50 節)という言葉によって、息子は「死」の瀬戸際から「生」へと移動する。父親がカファルナウムに下る途中、迎えに来た僕たちは、彼の子供は生きている(51 節)ことを告げる。父親は、息子の病気が癒されたのは、イエスが「あなたの息子は生きる」と告げた時であったことを知る(53 節)。このように、この癒しの物語は、「死ぬ」こと(47, 49 節)から「生きる」こと(50, 51, 53 節)への転換を強調し、イエスの言葉によって、瀕死の状態にいた役人の息子が「死」から「生」へと移動したことを語るのである<sup>17</sup>。

13 ブルトマン『ヨハネの福音書』、178 頁。Rudolf Schnackenburg, *The Gospel According to St. John* (trans. Kevin Smyth; 3 vols.; New York: Crossroad, 1968-82), 2:5-9.

14 C. H. Dodd, *The Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1953), 289-290; Brown, *Gospel*, 1:236; C. K. Barrett, *The Gospel According to St. John: An Introduction with Commentary and Notes on the Greek Text* (2nd ed.; Philadelphia: Westminster Press, 1978), 18-21; Udo Schnelle, *Antidocetic Christology in the Gospel of John: An Investigation of the Place of the Fourth Gospel in the Johannine School* (Minneapolis: Fortress Press, 1992), 99.

15 George R. Beasley-Murray, *John* (2nd ed.; WBC36; Nashville: Thomas Nelson, 1999), 79.

16 Peder Borgen, *Bread from Heaven: An Exegetical Study of the Concept of Manna in the Gospel of John and the Writings of Philo* (SNT 10; Leiden: Brill, 1965), 152.

17 この死から生への移動は、より発展した形で、ラザロの復活のしるし物語において繰り返される。

この死から生への移動は、講話部分における 5:24-25 の内容に対応する。イエスはそこで次のように述べる。

5:24 まことにまことにあなた方に言う。わたしの言葉を聞きわたしを遣わした方を信じる者は、永遠の命をもち、裁かれることなく、死から生へと移っている (μεταβέβηκεν ἐκ τοῦ θανάτου εἰς τὴν ζωὴν)。

5:25 まことにまことにあなた方に言う。時は来ている、いや、今がその時である (ἔρχεται ὥρα καὶ νῦν ἐστίν)。死者が神の子の声を聞き、聞いた者は生きるであろう。

この 5:24-25 は、「本質的にヨハネ的なケリュグマを含む」<sup>18</sup> のものであるとして、内容的に重要視されてきた。多くの解釈者は、24-25 節に復活への言及を読み取るが<sup>19</sup>、問題はどのような復活理解をここに想定するかである。ブルトマンは、24-25 節に、伝統的な終末論における生と死の理解からはラディカルに離れた、新しい生と死の理解を見る。信じる者は既に「死から生へと移動している」と言う時(24節)、この死と生とは霊的、実存的な死と生を指すのであって、それらは身体的な死とは関係性をもたない<sup>20</sup>。そして24-25 節で語られる生は、「最終的な自己理解の照明によって与えられる、実存のあの本来性」<sup>21</sup> なのであり、身体的な生の領域に属さないものである。ゆえにブルトマンは、この講話と、身体的生死に関わる癒しのしるしとの間に、内容的な連続性を認めていない。

しかしながら、アウネが指摘しているように、直前の 21 節が身体的な死者に言及していることから見て、24-25 節では霊的な死を問題にしているとする、ブルトマンの説は説得力に乏しい<sup>22</sup>。アウネが主張するように、21 節と同様 24-25 節でも、身体的な死が念頭におかれていると考えるべきであろう。4 章の癒しのしるしにおける身体上の死から生への移動は、講話部分で語られる 5:24-25 の内容と対応するものである。

4 章のしるし物語と 5 章の講話部分との強い連関性は、双方に存在する「時」への強調にも見てとれる。4 章の癒しで明確にされるのは、役人の息子が癒された「時」(ὥρα, 4:52) とは、イエスが「あなたの息子は生きる」という言葉を発したその「時」

18 Schnackenburg, *Gospel*, 2:108.

19 Schnackenburg, *Gospel*, 2:108; Frey, *Eschatologie*, 2:375.

20 ブルトマン『ヨハネの福音書』、211 頁。

21 ブルトマン『ヨハネの福音書』、212 頁。

22 David E. Aune, *The Cultic Setting of Realized Eschatology in Early Christianity* (SNT 28; Leiden: Brill, 1972), 119. アウネは、「死者」(νεκροί, 複数形) はヨハネ福音書では常に身体的な死者を指すと主張する。



(4:53)であったことである。一方、5章の講話は、死者の復活を主題とするが、それが起こるのは、死者が「神の子」(「人の子」)の声を聞く「時」(ὥρα, 5:25, 28)である。この点で、4章の癒しのしるしは、5章の講話が語る、神の子の声を聞いた者が生きる「時」の到来を、先取りの物語の中で示すものであると言える。

さらに、4章のしるし物語と5章の講話部分が共有するものとして、イエスの発する言葉への強調があげられる。4章の癒し物語では、癒される者は場面に登場することではなく、父親も読者も、イエスが言葉を発した時点で癒しが行われたことを後で知らされる。この、イエスが発する言葉への強調は、続く講話部分にも引き継がれる。講話では、神の子(人の子)の「声」を聞いた者が復活するとの言葉が二度繰り返され(5:25, 28)、神の子の「声」こそが、復活を起こす主体であることが明らかにされる。もちろん、4章の癒しのしるしにおいて、離れた場所にいた役人の息子は、イエスの言葉を聞いたとは考えられない。しかし、この物語で、イエスが発した言葉によって癒しが起こったことが強調されているのは既に述べたとおりであり、イエスの「声」がもつ特別な力に注意が喚起されていることは間違いがない<sup>23</sup>。

以上、述べたように、4章の癒しのしるしと5章の復活を語る講話とは、内容的に対応関係をもつ。5:24-25で述べられる死から生への移動は、既に擬似的な形で、4章の癒しのしるしにおいて起こっているのである。さらに、この死から生への移動は、少年一人にだけ経験されたのではない。このしるし物語の結論は、少年の父親と「彼の家全体」(ἡ οἰκία αὐτοῦ ὅλη)が「信じた」ということにある(4:53)。死から生への移動は、少年だけにではなく、この物語の主人公であり行動を起こした父親、さらに父親の家の構成員たちにも内的に経験されたからこそ、彼らは皆「信じた」のである。読者もまた、彼らのように、死から生への移動を経験し、信じる者となるよう招かれていると見るべきであろう。身体的な瀕死から生への移動を報告する4章のしるし物語は、5章の講話で語られる死から生への移動を、まさにこの世界で現実的に起こった出来事として描くことにより、読者がこれを物語世界で経験することを可能にしている。

続く5章のエルサレムにおける癒し(5:1-18)では、38年間病を患い、エルサレム神殿の傍らにあるベトザタの池のそばの回廊に横たわっていた男の癒しが報告される。この癒しも、4章における癒しと同様に、疑似復活として描かれている。38年もの長期にわたって病を患い、長らく横たわっていた者が、「起きる」という身体的動作は、死んでいた者が「起きる」という復活の動作と対応するものである。イエスが男に「起きよ(ἐγείρε)、床をとって歩きなさい」(8節)と命じると、男は即座に癒され、床

23 後のラザロの復活物語において、イエスは大声をあげてラザロに呼びかける(11:43)。イエスの声が復活を起こす主体であることは明白である。

をとり歩き出す(9節)。動詞「起きる」(ἐγείρω)は、5章の講話で復活を語る際に使われる動詞であり、癒し物語と講話を有機的に結びつける<sup>24</sup>。講話においてイエスは、「父が死者を起こし(ἐγείρει)、命を与えるのと同じように、子も、与えたいと思う者たちに命を与える」(21節)と述べる。そこではイエスの業は、父なる神が行う、死者を起こす復活の業と類比的に示される。ところでこの言葉の直前でイエスは、「父はこれらのことよりも大きな業を子に示し、あなたがたは驚くことになる」(20b節)と言う。「これらのことよりも大きな業」とは、9章の盲人の癒しと11章のラザロの復活の業を第一義的に指していると考えられる<sup>25</sup>。一方、「これらのこと」とは、上に論じた2つの癒しのしるしを指していると見てよいだろう。この2つの癒しのしるしは、ラザロの復活ほど発展した形をもつ長大なしるしではないものの、疑似的に復活として描かれている。ラザロの復活のしるしは、その延長線上におかれ、より大きな業と呼ばれているのである。

5章の癒し物語は、意外とも言える展開と結末をもつ。癒された者は、神殿の境内で再びイエスと出会うが、イエスのもとを立ち去るとユダヤ人たちのもとに行き、彼を癒したのはイエスであると伝える(15節)。その結果、ユダヤ人たちはイエスを迫害ははじめ(16節)、イエスが神を「わたしの父」と呼び自らの行為を神の業と比較するに至って、ヨハネ福音書で初めて彼らによるイエス殺害の意図が報告される(18節)。ここで癒された者が示す否定的とも見える反応は、同じようにユダヤ人たちに尋問される9章の癒された盲人の反応とは対照的である。盲人が、癒されてのちイエスと言葉を交わし、「主よ、信じます」(9:38)と告白してイエスを拝するのとは対照的に、5章の癒された人は、イエスに一言も言葉を返すことなくただ「立ち去って」(15節)、イエスのもとからユダヤ人たちのもとへと移動するのである。

この否定的な結果を伴う5章の癒しのしるしが、続く復活講話と内容的にどのようなつながるのかについて、解釈の困難さが指摘されてきた。ブルトマンは、5章の癒しのしるしは、安息日違反の物語として機能しているだけであり、続く講話への象徴的な意味をもたないとする。「この病人に与えられた健康は、啓示者が審判者として与える『生命』を象徴しているとは暗示されないからである」<sup>26</sup>。しかしながら、この癒し物語において与えられる命は、続く講話で語られる命そして復活と、内容的に何らかの関係性をもつと考えるのが妥当であろう<sup>27</sup>。その理解の鍵を握るのが、物語

24 Schnelle, *Antidocetic Christology*, 99.

25 さらに、「これらのことよりも大きな業」とは、福音書の物語の時間の枠を超え、復活して高擧されたキリストの業やヨハネ共同体の業を指す可能性もあるだろう。Schnelle, *Antidocetic Christology*, 149; Frey, *Eschatologie*, 2:352における議論を参照。

26 ブルトマン『ヨハネの福音書』、203頁。

27 Herman Ridderbos, *The Gospel of John: A Theological Commentary* (trans. John Vriend; Grand Rapids: Eerdmans, 1997), 196.

に記された否定的な結果である。すなわち、寝たきりの状態から起こされた者は、ユダヤ人のもとへと移動し、それが結果としてイエスの暗殺計画に発展する。癒された者は、この行為によって、イエスの敵対者が属する裁きの側へと移動しているとも考えられる。この解釈が正しいとするならば、癒しという本来肯定的な内容をもつこのしるし物語は、実は同時に、続く講話で語られる復活の否定的な側面である「裁きの復活」(29-30 節)を示唆していると言える<sup>28</sup>。

一方、4 章の癒しのしるしは、死から生への移動を示すものであり、この「裁きの復活」とは対照的な「命の復活」を示唆していると考えられる。5 章の復活講話の結論部分でイエスは、時がくると、人の子の声を聞いて墓の外に出てくる死者たちは善悪の行いに応じて、「命の復活」または「裁きの復活」に与かることを告げる(5:29)。2 つの癒し物語はこれに対応し、4 章の癒しでは、癒された者(とその家の者たち)は死から命の世界へと移り、「命の復活」を選ぶが、5 章の癒しでは、起こされた者は裁きへと移動し、「裁きの復活」の運命を待つ。このように、復活の対照的な側面(命と裁き)という主題は、まず、2 つの癒しのしるし物語において出来事として物語られ、続く講話の中で、未来に起こる事柄として未来形で予告される<sup>29</sup>。すなわち、講話の中で予告される終末時の復活は、既に、部分的な形であれ、先取りのしるし物語において表現されているのである。

以上述べてきたように、ヨハネ 4-5 章の 2 つの癒しのしるし物語は、講話で語られる復活の対照的な側面を具体的な出来事として描き、読者がそれを物語世界で経験することを可能にする。読者は、命の復活と裁きの復活という復活の 2 つの対照的な側面を、まずは物語の形で経験した後、続く講話で明確な説明のもとに予告され、自らはどちらの道を選ぶかという決断を求められる。ここで、しるしと講話とは協調的に働いて、復活の主題が通底するひとつの物語を構築し、読者に主体的決断を促すのである。

## 2. 6 章におけるしるしと講話

6 章は、リーに従うならば、大きく 4 つの場面に分けることができる<sup>30</sup>。それらは、

28 リーは、5:14 のイエスの警告が、講話におけるイエスの裁き手としての機能(5:22, 27, 29)と対応していると指摘する(Lee, *Symbolic Narratives*, 117)が、この癒された男が裁きの側に向かう者として暗示されていることは看破しない。

29 プルトマンは、5:28-29 で言及される黙示文学的な復活は、5:24-25 に見られる新しい生と死の理解と緊張関係にあるとし、5:28-29 を付加部分と見なす(プルトマン『ヨハネの福音書』、213-214 頁)。しかしながら、上で述べたように、5:28-29 で示される復活後の 2 つの対照的な運命が、講話の前におかれた 2 つのしるし物語の内容に対応するものと見るならば、5:28-29 を付加されたテキストとして切り離して読むことはできない。

30 Lee, *Symbolic Narratives*, 132.



1) 供食のしるし (1-15 節)、2) 水上歩行のしるし (16-21 節)、3) 講話と対話 (22-59 節)、4) イエスへの異なる応答 (60-71 節) である。この中で復活への言及は、2つのしるしに続く 3) 講話と対話 (22-59 節) に集中している。この講話と対話の中に 3つの講話 (32-40, 43-51, 53-58 節) が含まれるが、3つの講話すべてにおいて、「終わりの日にわたしは彼 (それ) を復活させる」(ἀναστήσω αὐτὸ[ν] [ἐν] τῇ ἑσχάτῃ ἡμέρᾳ) という定型的な表現によって終末時の復活への言及がなされる (39, 40, 44, 54 節)。

ブルトマンは、6 章には、しるしと福音書記者の神学との間に大きな緊張を見いださないうものの、両者の間に特に積極的な関係も見ない。ブルトマンによれば、福音書記者は、しるし資料から採用した供食の奇跡を、「生命のパンの授与者たるイエスという啓示講話の思想の象徴的な像として利用」するのに対して、水上歩行のしるしは、続く講話への補足的なつながりしか見せない<sup>31</sup>。さらに、ブルトマンは福音書記者の神学が示される講話には、徹底的な資料批判のメスをふるい、聖餐の食事への言及を含む箇所 (51-58 節) と、終わりの日の復活への言及 (39, 40, 44, 54 節) は、いずれも教会的編集者による付加と見なす<sup>32</sup>。したがって、ブルトマンの資料批判の立場からすると、二次的な付加である復活への言及と、2つのしるし物語との間の関係性とは、論ずるまでもないことである。

一方、リーは、6 章の講話を前にした対話部分以降、供食の物質主義的な解釈と象徴的な解釈の対立が鮮明になると言う<sup>33</sup>。リーによれば、講話で明らかにされる供食の象徴的な意味とは、イエスは実際の食物で満たすという身体的レベルよりも深いレベルで、人間の命への渴望を満たすということであり、それはすなわち、イエスが与える「永遠の命だけが霊的な必要を満たす」ことを指す<sup>34</sup>。つまり、供食のしるしがもつメッセージは、物質的な食物によって大群衆の身体的な空腹が満たされたという字義的な意味ではなく、イエスが永遠の命を与えるという霊的レベルでの象徴的意味にある<sup>35</sup>。このようなリーの解釈は、いわば供食の出来事そのものの意味を否定してしまっており、供食のしるし物語と続く講話との間に、本来、肯定的で、そこにあるべき有機的な関係を見いだすものではない。

しかしながら、供食のしるしと、続くイエスの講話、とりわけ終末時の復活への言及との間には、より積極的で有機的な関係を見いだせることを以下に指摘したい。ま

31 ブルトマン『ヨハネの福音書』、184 頁。同『新約聖書神学Ⅱ』、297 頁も参照。

32 ブルトマン『ヨハネの福音書』、185 頁。

33 Lee, *Symbolic Narratives*, 141, 142, 144.

34 Lee, *Symbolic Narratives*, 145-146.

35 ハイレンが正しく指摘しているように、リーの象徴的読みは、字義の意味と象徴的意味とを有機的に関連づけることなく、非字義的な象徴的意味にメッセージを見いだすものであり、そのヨハネ 6 章の解釈は、「字義的な意味から離れて、霊的な意味へと移動する」立場を示している。Susan Hylén, *Allusion and Meaning in John 6* (BZNW 137; Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2005), 188.

ず、供食のしるしは、飲食に関わるイメージが中心的である続く講話とのつながりをもつが、とりわけ、聖餐の食事への言及を含む第三の講話との関連を示すものである。イエス自身が大群衆にパンと魚を分け与える供食のしるしは、ブラウンが指摘するように、聖餐の食事への暗示を含んでいる。まず、イエスは、「感謝して」(εὐχαριστήσας) 人々にパンを分け与え(11節)、弟子たちに残ったパンくず(κλάσματα)を集めるように(συναγάγετε)と指示する(12節)。これらの用語は、「十二使徒の教訓」(ディダケー) 9:3-4 で聖餐の祈りに使われており、供食のしるしの描写は、聖餐の食事のイメージと深く重なり合うものであることが示唆される<sup>36</sup>。このように、供食のしるしに含意される聖餐の食事が、第三の講話において、終わりの日の復活と密接に結びつけられることについては、後述する。

次に、32節から始まる講話のすべてのセクションにおいて、供食のしるしから続く、食べる／食物というテーマが、復活という主題と密接に関連づけられる点に注目したい。まず、第一の講話(32-40節)は、その直前の対話(25-30節)で導入された「永遠の命に至る食物」(27節)というテーマを発展させ、それを復活と結びつける。35節で、イエスは自分自身を「命のパン」として啓示し、イエスのもとに来る者は決して飢えることがなく、イエスを信じる者は決して渴くことがないと約束する。この約束は、第一の講話を締めくくる復活への言及(40節)に引き継がれ、復活との関係で食のイメージのもつ重要性を示す。

続く第二の講話(43-51節)も、第一の講話に引き続いて、復活と食物とを関連させ、さらにその主題を発展させる。この講話では、まず冒頭部分で復活への言及がなされてから(44節)、イエスは再び命のパンとして自身を提示するが(48節)、その際、第一の講話に現れたマナとの比較(32-33節)に再び戻り、命のパンとマナを対比させて語る。すなわち、荒野でマナを食べた先祖は死んだが(49節)、この「天から降ってくる」パンを食べる者は死なない(50節)。この講話の最後で、イエスは、このパンを食べる者は永遠に生きる(51節)ことを約束する。ここで約束される死の超克、永遠の命は、講話の初めに言及される復活(44節)を前提とするものである。

第三の講話(53-58節)では、第二の講話の最後におけるイエスの肉への言及(51節)がユダヤ人たちの間に引き起こした激しい議論(52節)を目の前にして、イエスは宣言する。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしは彼を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食物でわたしの血はまことの飲み物だからである」(54-55節)。第一と第二の講話で自分自身を命のパンであると宣言(35, 48節)したイエスはここで、自身の肉を食べ、血を飲む者は、永遠の命をも

36 Brown, *Gospel*, 1:247-248.

つと述べて、終わりの日の復活を約束する。第三の講話では、「食べる」という動詞に、「噛む、咀嚼する」を意味する *τρῶγω* が 4 回使われ (54, 56, 57, 58 節)、字義通りの「食べる」という行為が意図されていることは明らかである<sup>37</sup>。また、「肉」(53, 54, 55, 56 節)を食べるということに、聖餐の食事が含意されていることは多くの解釈者が認める通りである<sup>38</sup>。この講話の結論部分は、再びマナへの言及に戻り、その対比として、「このパンを食べる者は永遠に生きる」と結ばれる (58 節)。復活と永遠の命とを「肉」と「パン」に結びつけて語る第三の講話では、「肉」および「パン」は聖餐のパンを含意し、これを食べることにより復活と永遠の命に至ることが示唆されるのである。

第三の講話とは異なり、6 章の他の講話と対話部分 (22-51 節) でイエスが口にする食をめぐる言葉は、象徴的、比喩的に理解されるべきであるとする議論<sup>39</sup>は、供食のしるしの後という文脈、また、第三の講話が明確に字義的な飲み食いに言及していることから不自然と思われる。供食のしるしでイエスは、身体的に飢えている群衆に字義的な食物を提供する。さらに、続く第三の講話では、明らかに字義的な食べ物と「食べる」行為とが言及されることを考えあわせると、第一と第二の講話でも、字義的なパン、そして実際に「食べる」という意味が含まれていると考えられる。すなわち、6 章の三つの講話のすべてにおいて、供食のしるしと密接に関わるパン、「食べる」の字義的な意味は廃棄されておらず、この主題が緊密に復活と結びつけられ、議論が展開されている。イエスが与える命のパンを食べることが、永遠の命と未来の復活へと直接つながるとするのがその結論である。その意味では、第一と第二の講話の「パン」にも、聖餐のパンが含意されていると考えるべきだろう。

以上で論じたように、第一から第三の講話のすべてにおいて、パンの食事と復活とは密接に結びつき、特に第三の講話において、このパンの食事には、聖餐の食事が含意されていることが強く示唆される。先に見たように、供食のしるしもまた、聖餐の食事への暗示を色濃く含むものである。第三の講話が聖餐の食事に言及するものと把握されるに至って、供食のしるしと聖餐の食事との結びつきはより確かなものと理解され、供食の食事は、聖餐の食事の先取りとして把握されるのである。

次に、供食のしるしと「メシアの宴会」とのつながりについても指摘したい。ウェブスターによれば、供食のしるしは、過去の、モーセによる荒野での奇跡を喚起する

37 Schnelle, *Antidocetic Christology*, 204-205 を参照。

38 ブルトマンもこれを否定することはできず、それゆえ、この部分を教会的編集者による付加と見なすのである。ブルトマン『ヨハネの福音書』、184-185 頁。

39 ブルトマン『ヨハネの福音書』、184-191 頁。他方、ダンは、第三の講話とそれ以前の部分との間にこのような理解の区別を設けることを批判し、6 章の講話全体において、イエスに帰される食をめぐる言葉を比喩的、霊的に理解する。また、供食のしるしの描写にも、聖餐への暗示を認めない。James D. G. Dunn, "John VI-A Eucharistic Discourse?," *NTS* 17 (1971): 328-338, esp. 333-335.

と同時に、終末時に期待されるメシアの宴会を指し示すものである<sup>40</sup>。ユダヤ教黙示文学において、十分な食物を与えるという奇跡は、終末時に期待されるモチーフの一つであり、この希望は、メシア待望と結びついて、メシアの宴会と呼ばれるものに結実する<sup>41</sup>。特に、このメシアの宴会が、復活の希望とも結びつくものであることに注目したい。2バラク書においては、終末時に復活が起こる直前に、天のマナの貯蔵庫が開かれ、地上の人々がマナを食べると記されている(29:5-8)。また、1エノク書では、終末時に復活した者がメシアとともに寝起きし、飲み食いを共にするだろうと言われている(62:13-16)。このメシアの宴会と復活との関係、及び、ヨハネ6章の講話における飲食と復活との結びつきを考慮に入れる時、講話の前におかれた供食のしるしは、復活後に与えられるメシアの宴会の先取りとして理解される。

このメシアの宴会は、また、最後の晩餐と、それに基づく聖餐の食事とに結びつけて考えられるものである<sup>42</sup>。ルカ福音書において、イエスは、最後の晩餐の席で、弟子たちが将来神の国においてイエスとの飲み食いに参加するであろうことを予告する(ルカ22:30)が、ここにメシアの宴会という終末への希望を見ることができる。ヨハネ福音書においては、最後の晩餐の席では洗足が行われ、共観福音書のようにイエスと弟子たちとの実質的な食事の場面は描かれず、聖餐を定めるイエスの言葉や終末時の宴会への言及も含まれない。ヨハネ福音書では、最後の晩餐の代わりに、6章のイエスと群衆との供食のしるしおよび続く講話が、聖餐の食事を示唆するものであり、供食のしるしはそれと同時に終末時のメシアの宴会の先取りであると考えられる。

供食のしるしが、聖餐の食事の先取りであるという解釈が正しければ、供食のしるしで与えられるパンは、講話でイエスが語る「命のパン」、すなわち自身の肉であるという「パン」を、先取的に物語の中で具現化したものと言える。さらに、供食のしるしにおいて、空腹であった群衆を満腹させたパンとは、イエスが十字架上の死と復活後に与えるパン、すなわち聖餐のパンと同時に、終末時に復活した者に与えられるメシアの宴会のパンをも指し示すものである。読者は、物語世界で、聖餐の食事とメシアの食事による祝祭が先取的に繰り広げられるのを眼前にする。そして、講話で、イエスこそがそのパンの与え手であると同時にパンそのものであり、聖餐の食事への参与が将来の復活へとつながることが示唆されるなかで、自らも聖餐の食事へ参

40 Jane S. Webster, *Ingesting Jesus: Eating and Drinking in the Gospel of John* (Atlanta: SBL, 2003), esp. 69.

41 この主題に関しては特に以下を参照。Dennis E. Smith, "The Messianic Banquet Reconsidered," in *The Future of Early Christianity: Essays in Honor of Helmut Koester* (ed. Birger A. Pearson; Minneapolis: Fortress Press, 1991), 64-73; Andrea Lieber, "Jewish and Christian Heavenly Meal Traditions," in *Paradise Now: Essays on Early Jewish and Christian Mysticism* (ed. April D. DeConick; Symposium 11; Atlanta: SBL, 2006), 313-339.

42 バレットは、共観福音書において、既に人の子と最後の晩餐が結びつくこと(マコ14:21/マタ26:24)、また、このような結びつきはヨハネ福音書にも含まれることを指摘する(6:27, 53, 54)。C. K. Barrett, "The Flesh of the Son of Man" John 6:53," in idem, *Essays on John* (London: SPCK, 1982), 37-49, esp. 44.

加し、救いを選び取るか否かを問われることになる。

読者にとって、供食のパンと「命のパン」あるいは聖餐のパンとの間には、物質的意味と靈的意味との区別は存在しない。双方ともに、イエスが与える真の糧の「しるし」である点では同一レベルにある。イエスが救済を、食物というイメージのもとに語るのは、救済が人間の身体から切り離されたものではなく、むしろ、復活後の「からだ」に関わる真に身体的なものだからである。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしは彼を終わりの日に復活させる」(54節)という言葉は、復活は、イエスの肉(パン)を食べ、その血を飲むまさにその身体に起こることを明示する。供食のしるしは、パンがパンであるからこそそのしるしであり、パンはそれ以外の何かを示す隠喩の媒体以上のものである。供食のしるしのメッセージはパンに内包されるのである。

続いて、水上歩行のしるし(6:16-21)と講話の関係について考察する。ハイレンによれば、共観福音書の並行箇所(マコ 6:45-52/マタ 14:22-27)と比べると、ヨハネでは神の顕現としての要素が強調されている<sup>43</sup>。マルコでは、イエスを幽霊だと誤解して(6:49)おびえた弟子たちに対して、イエスが「わたしだ」(ἐγώ εἰμι, 6:50)と呼びかけるが、これは「わたしは(あなたがたの知っている)イエスである」という意味である。これに対して、ヨハネにおいては、弟子たちは「イエスが湖の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て恐れた」(19節)と明確に報告されたその直後に、「わたしだ。恐れることはない」(20節)との言葉をイエスが発する。ここでの「わたしだ」は、出エジプト記に記される神の名前の自己啓示「わたしは在って在る者である」(ἐγώ εἰμι ὁ ὢν, 出 3:14 [七十人訳])を喚起するものであり、ヨハネにおいて水上歩行のしるしは、顕著な神顕現として描かれていると言える。

このような神顕現の性格をもつイエスの描写は、続く講話で復活の行為者として語るイエスの姿と響き合うものである。6章の復活講話では、3箇所(Iエス自身が、強調の人称代名詞(40節では ἐγώ、44, 54節では κἀγώ)を用いて「このわたしが復活させる」と宣言する。5章の講話においても、イエスは「子」(21節)として、また「神の子」(25節)、「人の子」(28節)として、復活を起こす主体であることが強く示唆されるが、これに対し、6章の講話では、復活の業を行う主体は、話者であるイエス自身であることが明確にされ、繰り返し、イエス自身が復活を起こすことが宣言されるのである。ユダヤ教では、命を与える、復活させるという行為は神にのみ帰せられてきた。5章における癒しがユダヤ人たちにイエス殺害の意図を引き起こしたのは、

43 Hylen, *Allusion and Meaning*, 134. 同様に、Gail R. O'Day, "John 6:15-21: Jesus Walking on Water as Narrative Embodiment of Johannine Christology," in *Critical Readings of John 6* (ed. R. Alan Culpepper; BIS 22; Leiden: Brill, 1997), 149-159, esp. 155.



イエスが、安息日の癒しという自らの行為を、安息日に命を与える神の業と同列においたからである (5:17-18)。神とイエスの関係というテーマは、復活というテーマと共に 5 章から 6 章へと引き継がれる中で、内容的に発展させられている。父と子の一致は 5 章の講話の重要なテーマであるが、イエスが神として顕現する、6 章の顕著にキリスト論的なしるしの後に初めて、講話により高度なキリスト論が表明され、イエスは自らが復活の行為者であることを明確にするのである。その観点からすれば、水上歩行のしるしは、神顕現のしるしとして、イエス自身を復活の行為者として強調する復活講話の高度なキリスト論を準備するものである。

以上で述べてきたように、6 章の 2 つのしるし物語は続く講話と結びついて、全体としてひとつの有機的な物語を構築する。まず、供食のしるし物語は、聖餐の食事とメシアの宴会を先取的に表現し、食のイメージと密接に結びついて未来の復活に言及する講話と共に、終末時に豊かな食物が与えられるという復活の命の一側面を表現する。読者は、復活のテーマが通底する供食のしるし物語と続く講話を読むことを通して、供食のしるしが先取りとして示す聖餐の食事とメシアの宴会に誘われる。次に、水上歩行のしるし物語は、特にキリスト論的なしるしとして、イエスの決定的な神顕現を描き出すことにより、続く、イエス自身を復活の行為者として強調する講話とのつながりをスムーズにする。読者は、この水上歩行の物語の中で、神として顕現するイエスの姿を目の当たりにすることによって、続く講話における、復活の行為者としてのイエス像を困難なしに受け入れることができるのである。

## おわりに

この論文は、ヨハネ福音書 4-6 章のしるし物語と続く講話のテキスト読解に基づき、以下の 3 つの結論を提示する。第一に、しるし物語と講話の関係に関しては、4-6 章に 2 組存在する、2 つの連続するしるし物語と続く講話は、復活というテーマを発展的に扱う大きなひとつの物語として読むことができる。まず、4-5 章の 2 つの癒しのしるし物語は、疑似復活の物語として描かれており、身体の癒しの中に、終末時に与えられる復活の命の重要な側面を示す。対照的な 2 つの癒し物語は、続く講話で語られる「命の復活」と「裁きの復活」という復活の両側面を、具体的な出来事として前もって描くものである。次に、6 章の供食のしるし物語は、終末時に復活の命を得た者が与かるメシアの宴会と聖餐の食事を先取的に示し、講話における「命のパン」と聖餐の食事への言及と共に、復活した者に与えられる救済の一側面を豊かな食物のイメージの内に表現する。一方、続く水上歩行のしるし物語は、決定的なイエスの神顕現を描くことにより、イエス自身を復活の行為者として明示する復活講話を

準備する。この神顕現後にはじめて、イエス自身の口から繰り返し、自らが終末時に復活の業を行う者であることが宣言される。このように、しるし物語と続く講話部分とは積極的、有機的な関係をもってひとつながりの物語を構成するのである。

第二に、このようなテキストの構造は、読者が復活の命の諸様相を豊かなイメージの中で味わうことを可能にし、読者の積極的な読み行為を引き出す。4-5章で読者は、癒しのしるし物語を読むことにより、続く講話で語られる死から生への移動である復活を出来事として物語世界の中で体験する。そして、癒し物語で暗示された命と裁きという2つの対照的な復活が、墓の中に眠るすべての者に起こることとして講話で予告されるとき、では、2つの復活のうちどちらの道を選ぶのかとの決断を求められる。6章で読者は、供食のしるしという物語世界の中で、あふれんばかりに豊かな食物が与えられる終末時の宴会と聖餐の食事へと誘われ、復活後の救済の祝祭的な一面を先取的に味わう。続く講話で、読者は、この祝いは「命のパン」であり復活の行為者であるイエスがもたらすものであること、また、イエスの肉を食べ血を飲む聖餐の食事に与えることが終末の復活に必要なことを聞く。そして、自らが聖餐の食事に参与するかどうかの決断を求められる。このように、講話の前におかれた4つのしるしのうち、水上歩行のをぞく3つのしるしは、続く講話で言及される復活の命、救済の重要な側面を読者に対して予め物語として具体的に開示し、物語世界の中で体験させるものである。そして、顕著なキリスト論的傾向を示す水上歩行のしるしは、イエスを神として顕現させることで、読者が続く講話に現れる復活の主体としてのイエス像を受容するのを容易にする。

最後に、しるしの神学的な意義は、ただイエスが何者であるかを示すことにあるのではなく、イエスがもたらす救済の具体的な諸様相を、地上において予め示すことにある。しるしの身体的、物質的な側面が明らかにするのは、キリストが与える救済は、この世界において身体的、物質的な変化を伴う出来事として起こること、また、人間はこの救済を地上で、具体的、感覚的に体験することができるということである。さらに、読者は、しるしをめぐる物語を読むことを通して、キリストの与える復活の命の諸側面を物語世界の中で具体的なものとして先取的に経験することができるのである。ヨハネ福音書のしるし物語は、この意味において、この世界における「しるし」であり続け、この世界のただ中で、読者に復活の命を経験させ続けると言ってよいだろう。

付記 本論は、2015年にエモリー大学に受理された博士論文“Reading John 11:1-12:11 through the Lens of the Resurrection in 1 Enoch”の第3章の一部を基に、大幅に修正、加筆したものである。